



『義の想いつなげ未来へー』
 SAMURAI CITY AIZU
 その答えが見事に会津若松市の
 戊辰150周年のキャッチコピー、
 ロゴマークに表されています。大
 義・忠義・信義・道義 会津はこ
 の「義」に従ったのです。
 鍋島藩の「葉隠」、新渡戸稲造の

「たなど」と言う事はありません。
 何故会津はこの困難な道を選択し
 たのか。

「武士道」の言を俵たすとも「義」
 の心こそが武士の矜持です。さら
 に言うならば「義」の心は武士階
 級に限らず日本人の行動規範の根
 幹とも言えるでしょう。そうした
 観点から見れば幕末会津は正に「日
 本人」の原点に立ち返り苦渋の決
 断の上に行動したとも言えるので
 はないでしょうか。私は勝者の歴
 史で語られる「明治維新」が正義
 だったとは全く思えません。さら
 に江戸城開城以降、明治新政府に
 より執拗に仕掛けられた戊辰東北
 戦争、会津戦争に至っては全く「義」
 の無い不必要な戦いだったのです。
 そこで流された幾多の血や犠牲は
 防ぐ事が出来たかも知れないので
 す。結果として会津は戊辰戦争、
 会津戦争で悲惨な運命を辿りまし
 たがこれは決して恥ずべき事でも
 隠すべき事でも有りません。寧ろ
 誇りです。目先の事や、損得に捕
 らわれず為すべき道を如何なる苦
 難があろうとも「義」に基づいて
 行動した結果だったのです。戊辰
 百五十年の今、改めて会津の先人
 たちの決断と行動に崇敬の念を持
 ち私たちはこの会津の「義」の心
 を未来へ継承して行かなければな
 りません。



会津藩の成り立ち

徳川幕府成立前の領主としては、蒲生氏郷（92万石）、上杉景勝（120万石）が知られる。成立後の会津藩主としては、蒲生秀行・忠郷（60万石）、加藤嘉明・明成（40万石）を経て、1643年（寛永20年）保科正之が最上から転封し、会津四郡23万石を領して会津藩初代藩主となった。

保科正之は二代将軍徳川秀忠の異母弟で、信州高遠城主保科正光の養子に迎えられた。会津転封後、1696年（元禄9年）には松平の姓を名乗り、「葵」の紋章を用いることが許された。初代正之のあと、会津藩は二代正経—三代正容—四代容貞—五代容頌—六代容住—七代容衆—八代容敬—九代容保—十代喜徳と継がれていく。

九代容保は幕末の混乱期に京都守護職となり、戊辰戦争で敗れた最後の会津藩主となった。

寄稿

これからの会津を思う 未来をつむぐ百五十年目の便り

戊辰150周年に想つ会津 義の心

会津松平家十四代 松平保久



「今、こうして我々松平家がこの
 世に在るのは全て会津のお陰だ
 その事を片時も忘れてはならない」
 今は亡き、先代の父、保定から

小さい頃に良く聞かされた言葉で
 す。

父、保定もこの言葉を祖父の保
 男から聞かされて育ったのだと思
 います。

その言葉は今
 も私の心の中で
 響いています。
 特に戊辰150
 周年と言う大き
 な節目の今年、
 「会津」という
 言葉の重みを感じ
 ています。
 幕末会津藩の
 辿った歴史は困
 難で悲惨なもの
 でした。精神

誠意、徳川將軍家、帝への忠誠を
 貫きながらも謂れなき朝敵の汚名、
 過酷な会津戦争、そして明治期に
 なってからも会津の人々には数多
 くの困難が待っていました。全国
 の大名家の多くが明治新政府側に
 雪崩を打つ様に与する中、会津は
 愚直に頑なに自らの道を歩み続け
 ました。「会津は旧弊で情報にも疎
 く先見の明が無く、時流を読み切
 れなかったただだ」などと言う声
 があります。それは全くの間違い
 です。
 藩校日新館を中心とした会津の
 教育、人材育成への取り組みは藩
 祖、保科正之の公以来、全国でも有
 数のレベルです。その会津藩が幕
 末の政治状況や時流が見えなかつ

戊辰150周年に寄せて

福島県知事 内堀 雅雄



戊辰戦争から百五十年が経過する節目の年を迎え、このたび、「会津若松市戊辰百五十年記念誌」が発刊されますことを心からお喜び申し上げます。

会津若松市では、「義」の想いつなげ未来へ。戊辰150周年」をキャッチフレーズに、会津武士の魂を未来へ伝えるため、多彩な事業が開催されております。この間、国内のみならず、海外からも多くの方々が会津若松市を訪れ、会津藩が貫いた「義」の精神に触れるなど、会津の心と歴史を体感いただいております。

戊辰戦争の悲劇に見舞われた先人たちは、想像を絶する苦難や逆境の中にあっても、郷土の「誇り」

を胸に必死で乗り越え、新たな境地を切り拓き、日本の近代化をリードする人材が数多く輩出されました。その歩みは、復興に向けて挑戦を続ける現代の私たちの姿と重なるものがあります。

東日本大震災から七年余が経過する中、県民の皆様の懸命な御努力と国内外からの温かい御支援により、新たな拠点施設の整備や観光地におけるにぎわいの回復が進んでいるほか、先日全国新酒鑑評会では、会津の酒蔵を始めとした県産日本酒が金賞受賞数六年連続日本一の快挙を達成するなど、これまでの取組の成果が着実に形となって現れ、明るい光が一層の強まりを見せております。

こうした光をより確かなものとし、福島県の強い復興・創生を推し進めていくために、これからも私たちは、先人たちが脈々と築き上げてきた郷土に対する「誇り」と、逆境にも負けない「不屈の精神」を持って、県民の皆様、そして福島に思いを寄せてくださる全て

の方々と共に、復興への歩みを進めてまいります。

結びに、本誌の発刊に御尽力されました皆様に深く敬意を表しますとともに、本誌の発刊がふるさ

『会津若松市戊辰150周年記念誌』への言葉

青森県むつ市長 宮下 宗一郎



会津若松市の皆様からいただいた言葉です。この言葉を聞いた時、会津と斗南の間には、悠久の時を刻んでも決して途絶えることのない深い御縁があることを改めて実感いたしました。

この度、会津若松市の新たな発展に向けて、『会津若松市戊辰150周年記念誌』が発行されますことを心からお喜び申し上げます。「お帰りをさい!!」私が会津藩公行列に「松平容大公」として平成二十七年に参加させていただいた際、沿道を埋めた

百五十年前の戊辰戦争を契機に、旧会津藩士が、陸奥の地に斗南藩を立藩しました。斗南藩が存在したのは、廃藩置県が行われるまでのわずか一年数か月であります。その後、陸奥の地に踏みとどまった斗南藩士の方々もたらした数多くの御功績により、当市は、下北地域の中心都市としての礎を築き、また、全国にその魅力を発信し、注目される都市になりました。

このような歴史的背景をきっかけとし、会津若松市とは、鶴ヶ城築城六百年にあたる昭和五十九年に姉妹都市の盟約を締結させていただきました。以来、市職員・市議会議員同士の相互訪問による官の交流に始まり、商工会議所や青年会議所をはじめとする民の交流、小中学生や高校生などの次世代を担う子ども達の交流、またスポーツや音楽等を通じた多方面にわたる交流にいたるまで、幅広い分野において相互の友好を深めることが出来ました。

二〇二〇年には、会津藩士がむつ市に上陸してから百五十年の節

目を迎えることとなりますが、この度の戊辰150年の節目にあたり、先人の残した功績に敬意と感謝の思いを忘れることなく、その志を受け継ぎ、「お帰りをさい」との声をいただける意味を次世代にしっかりと繋いでいかなければならないと考えております。

結びに、『会津若松市戊辰150周年記念誌』を刊行されました会津若松市戊辰150周年記念事業実行委員会の皆様方に心から感謝申し上げますとともに、会津若松市の限らない御発展をお祈り申し上げます。

戊辰150周年に寄せて

徳島県鳴門市長 泉 理彦



このたび、会津若松市が戊辰150周年の節目を迎えられ、記念誌を刊行されますことを心からお喜び申し上げます。

戊辰戦争により、多くの悲劇と苦境がもたらされたにもかかわらず、新しい未来を創造するため、

との歴史を見つめ直し、その魅力を再発見する契機となることを御祈念申し上げます、お祝いの言葉いたします。

松江豊壽氏の銅像が建立されました。この銅像は、これからも永く、両市の友好の証として広く市民の皆様にも愛されるものと期待をしております。

偉大な功績を残された松江氏により、会津若松市との縁をいただきましたことに心から感謝するとともに、戊辰150周年、第九アジア初演100周年を機に、両市がさらに親交を深め、平和の大切さを世界に広く発信していくパートナーとして、これからも共に歩んで参りたいと思っております。

結びとなりますが、戊辰150周年記念事業のご成功と会津若松市の今後益々のご繁栄を祈念いたします、私からの挨拶いたします。

そして、今からちょうど百年前、ドイツ兵たちによってベートーヴェン「第九」交響曲がアツアで初めて鳴門の地で演奏されました。

ベートーヴェン「第九」は、現在もなお鳴門市を代表する文化として脈々と受け継がれ、会津若松市と鳴門市の親善交流の原点として、広く愛されております。今年六月、鳴門市ドイツ館前に

戊辰150周年に寄せて

長野県伊那市長 白鳥 孝



会津若松市と伊那市のご縁の始まりは、江戸時代に遡ります。

会津藩祖である保科正之公は、高遠（現在の伊那市高遠町）で幼少期を過ごしました。保科家の家督を継いで高遠藩主となった後、国替えにより山形藩主を経て会津藩主となりましたが、移封の際には高遠近郷から多くの人を集めて家臣団を再編成したと伝えられます。つまり、高遠や伊那から多くの人々が正之公に従って会津へと移っていったのです。その後も子孫たちは、かつて先祖が暮らした高遠を度々訪れ、往時に想いを馳せたそうです。会津で見かける「北原」「伊東」「池上」「山川」などの姓は、伊那市でも見られる姓で、会津とのつながりが世代を超えて

現在まで続いていることを実感させられます。

大名の国替えは食文化にも影響をもたらしており、会津に定着した「高遠そば」も正之公が御地に伝えたものだといわれます。この「高遠そば」は、発祥の高遠では失われつつある食べ方でしたが、平成に入り、会津の皆さまのお力添えで復活させることができました。現在は高遠でもご当地グルメとして多くの観光客の好評を博しています。会津でお馴染みの「天ぷらまんじゅう」も、伊那地域のお盆には欠かせない食べ物です。会津と伊那は地理的には離れていますが、これほど近い食文化が根付いており、親近感を感じざるを得ません。

残念なことに戊辰戦争の際、高遠藩は新政府軍の一員として会津へ出兵し、会津の人々と対峙するという悲しい歴史もありました。しかしながら、江戸時代以降の歴史的な縁をきっかけとして、平成十二年九月、当時の高遠町と会津

若松市の間で親善交流が結ばれ、市町村合併により新伊那市となった後の平成二十二年四月には、会津若松市と伊那市は親善交流を宣言しています。

戊辰150周年によせて

神奈川県横須賀市長 上地 克明



会津若松市の皆さまにとって大切な節目となる戊辰150周年にあたり、友好都市である横須賀市を代表し、ごあいさつ申し上げます。

日本の大きな変換期の舞台であった百五十年前の会津の歴史を

にさせていただきます。行政はもとより多くの市民のみなさまによる活発な交流により、太い絆が築かれています。

この太い絆をさらに永遠の絆として、未来を担う子どもたちにつながっていくことを願っております。

振り返る時、私たちの胸には、さまざまな思いが込み上げてまいります。自らの意志と正義を貫いた生き様、そして、多くの苦難に立ち向かいながら誇り高く未来を切り開いた熱い志は、現代を生きる我々に、今もなお多くの示唆を与えてくれます。

会津若松市と横須賀市との縁は、鎌倉時代にさかのぼります。三浦大介義明の子である佐原十郎義連が、一一八九年の奥州合戦での戦功により源頼朝から会津四郡を与えられ、その後、義連の子孫である菅名氏が四百年間に渡り会津を

治めました。

一方、幕末の一八一〇年には、幕府の命を受けた会津藩が江戸湾防備のため、家族とともに三浦半島に移住し、そのほぼ全域を会津藩領とし統治しました。任が解かれる一八二〇年までの間に横須賀で生涯を閉じた会津藩士やその家族も多く、その墓碑が横須賀市内に五十一基、三浦市に三十七基あり、約二百年が経過した今も、市民の有志の会である「三浦半島会津藩士顕彰会」による法要が毎年行われています。

このように相互に統治し統治された全国的にもめずらしい歴史的なつながりを背景に、会津若松市と横須賀市は、未来に向けた親善交流を推進するため、二〇〇五年四月に友好都市の盟約を結びました。現在も市民団体による文化交流や、物産展などの経済交流など、幅広い交流が行われています。

私は、昨年初めて「会津まつり」に出席し、会津藩公行列を見させていただきました。地元高校生をはじめ多くの市民が参画し、全市を挙げて盛り上げる勇壮なまつりと、会津の皆さんのホスピタリティに感動しました。

人情に厚く、実直な土風が今も根付く会津若松市と、今後さらなる友好の絆を深めていくことを楽しみにしています。

余市の礎、未来に繋げる会津藩士の功績



余市町は農業と水産業、ドラマ「マッサン」でも脚光を浴びたワイスキー、そして近年では地元産のぶどうを使ったワイン作りが盛んな町です。

中でも果樹栽培をはじめとする農業は、約百五十年前、旧会津藩士の手によるりんごの栽培成功を大きな契機として以来、漁業と並ぶ基幹産業として今日の町の発展へとつながりました。

明治二年、旧会津藩士の北海道

しみにしています。戊辰150周年記念事業のご成功と会津若松市のさらなる発展を祈念しています。

北海道余市町長 齊藤 啓輔

行きが決まり、紆余曲折を経て、明治四年から翌年にかけて、旧会津藩士団二百二十六戸が余市川の両岸から入植されました。

明治八年には開拓使によってリンゴなどの苗木が配布され、四年後の明治十二年、「緋の衣」「国光」が日本で初めて実を結び、その後、りんごは本町の名産品として産業の発展の基礎となりました。また、入植した方々は「日進館」「講武館」を設立し、会津から取り寄せた漢籍を使用するなど、子弟の教育にも力を注ぎ、日進館は本町の学校教育の礎となっています。

こうした歴史的なつながりを大切にしたいという思いから、近年会津若松市と本町の交流も一層盛んに行われています。

平成十七年には、平成十一年に

余市町内の吉田観光農園から会津若松市の平成りんご研究会に贈られた「緋の衣」が、関係者の皆様のご努力により結実し、これを記念して緋の衣の苗木の里帰りが実現しました。

そして、平成二十七年十月十四日、様々な苦難を経て本町にたどり着き、発展の基礎を築き上げた先人の歴史と、今なおその強い思いがしっかりと根付いていることを改めて認識し、次世代へと引き継いでいくため、会津若松市と本町は親善交流都市の盟約を結びました。

以後、未来を担う小中学生の交流学習事業、関係団体や地域住民の相互訪問も行われるなど、交流はますます活発になっており、最近では、個人やグループで本町にお越しになり、歴史資料の研究や会津藩士墓への墓参をされる会津若松市のお客様も多くなっています。

戊辰150周年という節目の年を迎え、両市町がこの絆を一層強いのものとし、さらなる交流の輪を広げるとともに、新たな時代に向かってともに進んでいくことを心から祈念いたします。

戊辰150周年、歴史に「なぜ？」を問う

会津会会長 柳澤 秀夫



戊辰150周年という節目の今年、幕末の日本で、そしてふるさと会津でいったい何が起きたのか？改めて歴史をたどることはとても意義深いことだと思います。私自身、各地に残る戊辰戦争にまつわる史跡を訪ねてみて、これまで知らなかったことがあまりにも多いことに驚かされました。しかし同時に過去にどんなことがあったのかを知り、知識を増やすだけでは必ずしも十分ではないと私は思っています。「温故知新」の喩えどおり、過去の出来事から教訓を導き出し、それを今、そして将来に生かしてこそ歴史を学ぶ意義があるのではないのでしょうか？

ただ、これはそんなに簡単なことではないことも事実です。会津にとっては「維新150年」ではなく、あくまでも「戊辰150年」であるように、歴史の評価は立場によって異なり、それゆえ導き出される教訓も決して一つではないからです。一口に歴史と言っても誰にとつての歴史なのか？それによつて教訓はまったく変わってしまいます。

とは言え、戊辰戦争に至る会津の歴史を振り返る時、私は敢えて「なぜ？」という問いにこだわりたいと考えています。厳しい選択を強いられた幕末の会津にとつて、一つ一つの局面で「なぜ？」と問いかけてみても、容易に答えを見出すことはできないかもしれせん。しかし答えが見いだせなくても、「なぜ？」と問い続けることにこそ意味があるように思っています。過去の歴史を変えることはできません。しかし、過去から学び、未来を変えることはできます。

先人たちの労苦をしのび犠牲者を悼むことは当然のことです。しかし、過去の悲劇に涙するだけでは、先人たちの思いに報いることにはならないと私は思っています。時代が大きく変わっても、二度と

会津若松市戊辰150周年を迎えて

京都府会津会会長 大竹 文夫

この度、戊辰150周年を迎え記念誌を刊行されますことを心からお祝い申し上げます。

また、会津若松市の「記念誌」に寄稿の機会を与えて頂きまして感謝申し上げますと共に毎年の京都府会津会主催の「会津藩士殉難者慰霊祭法要」には遠路ご多忙の中を会津若松市長初め各会の関係者多数の方が出席して頂いており心よりお礼申し上げます。

私は会津生まれと言っても南の在育ちで田舎者です。ただ私の母親は生粋の会津人で「義理人情」が厚く人助けをしている姿を多々見ておりました。また驍も厳しかったですが社会に出てからは知らず知らずにならぬことが多く今だに

悲劇を繰り返さないためにいったい何ができるのか？その答えを探し続けることが、戊辰150周年の今の時代に生きる、私たちのつとめではないでしょうか？

母親には感謝しております。

会津人は苛酷な戊辰の役を戦った群像の足跡を辿れば自から心は凜然とします。賊軍とされ死よりも辛かったであろう人生をなぜ会津藩士達はあの様に私心なく「公」と「大義」のために生きることが出来たのか。答えは教育にあったと思います。会津教育の基礎を形にしたのが藩祖保科正之だと言われています。「正之公」は上に立つ者の責任は領民を守ることだと心得させ凶作などに備えて「コメ」や「カネ」を藩に預けておくための制度を創ったとも言われています。また「儒学者」や「神道学者」、「算法歴法家」などを重用しされ学問を奨励し武士と庶民の教育を目的

戊辰150周年に寄せて

みやぎ会津会会長 東洋ワーク株式会社

代表取締役社長 須佐 尚康



して何かを犠牲にしても決心しなければならぬ場合があります。そのような時、私の中心軸となつたものは「義」でした。

七年半前の東日本大震災では沿岸部で就労していた弊社の三百四十名の従業員が、津波で職場を失いました。基本理念に「人間尊重」、経営理念に「社員に喜ばれる経営、そして社会に貢献できる企業を目指す」と掲げてきたことが脳裏を掠めました。会津出身者として、また、企業経営者である私にとって自らが掲げた「基本理念・経営理念」は、単なる謳い文句ではなく、何があつても、守り通さなければならぬ約束事です。いまここで職場を失った従業員を解雇した場合、彼らは家族を抱え行き場を失います。しかし、職場もないのに従業員を抱えていれば、人件費が高むだけです。考え抜いた挙句、出した結論

は「一人たりとも解雇しない」でした。決めるや否や、仙台空港閉鎖時、陸路新潟へ行き、新潟から福岡に飛び、広島、三重と行脚を重ね、これまでお付き合いいただいている会社に惨状をご理解頂き三百四十名全員の受入れを承諾いただきました。

この一連の行動は、会津の訓えが根底になっていきます。会津の魅力は、仕の掟に代表される是々非々の訓えですが、重要な決断を迫られた場合に心の拠り所となつて「あるべき姿」に繋がる道を指し示してくれれます。戊辰の戦役から百五十年を経た今、会津が全国の人々の心を惹きつけて止まないのは、時代を超え変わらずに生き続ける訓えがあるからであり、この訓えの更なる拡がりを願って止みません。

とした稽古堂を創設され身分を超えて広く教育を広め全国で最も早い一六六四（寛文四）年の創建で藩士子弟のため武芸を加えた郭内講所さらに「日新館」へと発展したと言われています。

会津は家庭教育も徹底され十歳で日新館に入学する前に幼年教育を各家庭で心得をさせ、友情などの社会人の基本を子供同志の交わりの中で学ばせていました。こうした藩の教育と家庭教育が重なつて会津藩士の人材が輩出されていたことと推察します。会津藩には逆風に向つて進む気骨あふれた人が多かった。それは教養と規範をきちんと身に付け雅やかな心を備えていたからだと思います。だからこそ戊辰戦争から百五十年を迎えた今もなお多くの人々の心を打つのだと思います。私も会津を離れて六十年余になりますが今以つて会津人であることを誇りに思つておられます。

結びに当たり 会津若松市の今後ますますの御発展と皆様方の御健勝と御多幸を心からお祈り申し上げます。お祝いの言葉とさせていただきます。

私は会津に生まれ育ち、二十八歳で現在の会社を創業、その後一貫して経済界で活動して参りました。齢七十を数えるこの時までには幾多の重要な決断を迫られる状況に遭遇しました。その時々、状況は様々でしたが、いつも根底にあったのは「会津人らしさ・会津の誇り」でした。戊辰150年の今年、あらためて先人の足跡をたどり、その時々の決断に思いを致すとき、より一層、会津人であることの誇りを強くする次第です。

経営者として決断する際には、三方よしとするようなバランスのいい決断が要求されますが、時と

会津魂を引継いだ斗南士魂

斗南會津会会長 山本源八



現在の斗南會津会は明治十五年

廃藩置県後にこの地に残った旧藩士達が会津への望郷の思いを胸に結成された。今は移住後の四代五代の末裔が先人達の生きた証しを誇りに史実をしっかりと次世代へ繋ぐと日々情報を共有し活動している。思い起すと百四十八年前、約一万七千三百名の会津人が酷寒の中、海路陸路と移動を余儀なくされたがその時の当事者の気持ちを考えると現在の平和な生活を何となく喜んでいる私達には想像がつかない。本来であれば一般住民迄巻き込んだ戊辰戦争に、特に会津藩の重鎮並びに藩士に対し強い憤りと反感を持ち秩序を乱す者がいても当然と思われるが住民の心底は新天地へ行って、今一度藩を再興しようとする強い信念が

黙々と行動に移したといえる。斗南では広澤安任、山川浩、永岡久茂が中心となって藩政を敷き、外地形成、港湾開発、貿易、農地開拓、山林育成と様々な施策を起すもわずか一年九ヶ月の斗南藩であった。

しかしながら今日の青森県を始め各自治体での会津人の政治経済、文化、教育等、地元への貢献は語り尽せない程、大なるものがあつた。これらの人的、知的、物的な財産が今の青森県の基礎となっているのは間違いない事実である。

そして斗南藩移封をきっかけとしてむつ市と会津若松市が姉妹都市盟約を結び役所間の人事交流、市民交流、物産等の経済交流に取り組んで三十五年余。斗南藩が縁で両市の市政発展に少なからずも寄与してきた事を思うと関係者の一員として内心、嬉しい限りである。

私共は二年後には斗南藩立藩百五十年を迎える事となるが過去に秩父宮妃勢津子殿下をお迎えし

感動地へ」。観光の持つ力は、地域を良い方向に変えられるという信念のもと、感動の大会を目指し準備を進めております。

また、歴史的な縁を切り口として、平成二十八年七月「ゆかりの地CCI観光ネットワーク」を京都で発足し、函館・余市・むつ・米沢・日光・横須賀・静岡・浜松・岡崎・桑名の各商工会議所に支援商工会議所の京都商工会議所を加え、十二の商工会議所がネットワークを結び、各地のPRや交流の中で絆を深めるべく活動しております。幕末の戦乱の中で紡がれた絆がいま、更に強い絆となり、後世

に繋がられるよう今後も活動を続けてまいりたいと考えております。

このように戊辰150年は、幕末を起点とした会津の歴史的意義の再認識を図る重要な機会であり、直すと改めると歴史や文化を見つめる節目を機に、私たち商工会議所は地域総合経済団体として、行政との役割分担を明確にしなが、観光誘客や風評被害の払拭につなげるとともに、人口減少や高齢化などの課題を抱え低迷する地域経済の立て直しと完全復興に向け、決意も新たに取り組んでまいりたいと存じます。

の百年祭、百二十年祭、百四十年祭、三年前の百四十五年祭と周年行事を挙行し戊辰戦争で亡くなられた先人の御霊に哀悼の意を表すとともに戊辰への思いを語り

戊辰150周年に寄せて

会津若松商工会議所会頭 渋川 恵男



会津若松市戊辰150周年記念誌が刊行されますこと、心よりお祝い申し上げます。

本年、幕末我が国を二分した戊辰戦争から百五十年の節目を迎え、会津の歴史的意義を再認識するとともに、先人たちへの感謝を改めて感じる絶好の機会であり、様々な想いが駆け巡ります。

この戊辰150周年に向け、当所では「機運醸成」を第一に考え

合ってきた。今後もこの史実を次世代へ継承していく責務があり日々の活動を通してその成果を来る立藩百五十年に先人へ報告したいと思っている。

昨年度より商工会議所事業の根幹を成す9つの部会活動の一環として、戊辰150周年記念に関するPRグッズを数多く作成したほか、歴史講演会や創業150周年企業表彰も開催するなどし、民間レベルでの浸透に注力してまいりました。

そして戊辰150周年を迎える本年、全国から商工会議所関係者約千三百名が来訪する「全国商工会議所観光振興大会 in 会津若松」を開催いたします。幕末の歴史資源を観光に活かして、今の会津若松があるのは事実であります。当所ではこれまで産業観光や街道観光などに光を当て、新たな観光地の可能性にも挑戦しております。この大会のテーマは「観光地から

が、全国的に知られることになったこのできごとは、言うまでもなく会津にとっての最大の悲劇でもありました。

会津の人々は「賊軍」「朝敵」という汚名を着せられ、多くの犠牲者を出し、また生き残った人たちは斗南へ移転を命じられます。米華を誇った城下町若松は、人口も半数以下となってしまいました。国内は明治維新によって急速に近代化がすすめられ、庶民も激変する日常への対応に追われる日々でしたが、会津の人たちにとっては表面的な暮らしの変化に過ぎなかったのです。昭和三年に旧藩主松平家から節子様(秩父宮家へ嫁がれることが報じられると、若松の人たちは「ようやく朝敵の汚名が晴れた」と喜んだそうです。実に六十年の歳月を要しました。裏を返せば、会津ではそれほどまでに戊辰戦争での正当性を信じ、長くつらい日々を過ごしたということと言えるでしょう。

会津は、今や全国有数の観光地になっています。その観光資源の中核となっているのが戊辰戦争における爪痕であり、そこに息づく会津の精神性にほかなりません。

戊辰150周年に寄せて

一般財団法人
会津若松観光ビューロー理事長

新城 猪之吉

二〇一八年は、会津の歴史の上でもっとも重要なできごとである戊辰戦争から百五十年という節目の年になります。「会津」や「鶴ヶ城」

しかし地元で暮らす会津の人たちはどうでしょう。今では観光に訪れる人たちよりも会津のことを知らないでしうか。今年はそのことを振り返る絶好の機会だと思えます。

私たちが管理する鶴ヶ城や御業園には、そうした歴史が至るところに息づいています。歴史の勉強をしようと思うと敷居が高く感じられるかもしれません。気軽にお立ち寄りいただき、郷土の歴史を感じていただければと思います。私たちは、そのような貴重な歴史の遺産を守り、活かすことを第一に考えて、他地域を訪れた際には胸を張って会津のことを自慢できる、そんな市民が一人でも増えてくれればと思います。

鶴ヶ城は、十二万市民はもとより、会津の宝であり、当観光ビューローといたしましても戊辰150周年を一つの契機として、より一層市民に愛され気軽に足を運んでいただけるような施設運営に努めて参ります。

東山温泉盆踊りに刻まれた歴史

東山温泉観光協会会長 川添 修也



会津若松市の東に位置する東山温泉は、市内中心部から車で約十分の距離にあり、アルカリ泉の温泉は、古くから多くの市民に親しまれてきました。

その歴史は古く、天台宗の高僧行基が千三百年前に開湯されたと言われており、東北では奥羽三楽郷の一つに数えられ、その中でも最も古い温泉場として全国的にも有名になっています。

東山温泉の盆踊りは、江戸時代に入り温泉場の高台にある湯泉神社の境内で、東山甚句を唄い踊って先祖の供養と無病息災を祝っていたものです。

このお祭りは、昭和十九年の戦時中、東京から二千名近い児童の

疎開が会津若松に決定し、女子約千四百名を東山温泉の各旅館で引き受けることになった時、大きく変わりました。

会津若松には一度も空襲はなく、疎開児童にとって安心できる場所でしたが、ホームシックと、両親の安否を気遣い、よく旅館の中で泣いていたそうです。それを憂いた旅館の旦那衆と、当時の東山村長（佐藤武夫氏）が相談し、疎開児童を元気づけようと、東山温泉中心部の湯川の中に櫓をたて、盛大に盆踊りをしようと言う話になりました。旅館の女将さんや芸妓さんまで手伝って、盆踊りの練習をしたそうです。

しかしその盆踊りも順調にはいかず、特別高等警察より、戦時中に不謹慎であると中止命令が出されました。それでも戦勝祈願祭と名前を変え、逮捕者を出しながらも、命令を無視して強行し、疎開児童達はその盆踊りに涙を流して喜んだそうです。翌年の敗戦の年も、疎開児童を励まそうと、前年

にもまさる盛大さで執り行われました。

それから数え、今年で七十四年目をむかえる東山温泉の盆踊りは、今では観光名物となり、多くの市民の方が参加されるようになりました。

平成二十三年に発生した東日本大震災の時には、被災した大熊町の町民を東山温泉全体で二千三百人受け入れ、盆踊りでは、大熊町

の町民のために、会津磐梯山踊りだけでなく、相馬盆唄と踊りを取り入れて一緒に踊りました。

東山温泉の盆踊りは、台風や大雨で櫓が流されても一度も中止されたことがなく、まさに江戸時代から続く伝統ある大切な文化です。

この東山温泉の盆踊りを後世に伝えて続けていくのが、東山温泉観光協会の使命と痛感いたしております。

戊辰150年の節目にあたっての 芦ノ牧温泉における将来に向けた展望

芦ノ牧温泉観光協会会長 谷川 智佳也



ここに「会津若松市戊辰150周年記念誌」が発行されるに際し、会津若松市の南に位置いたします芦ノ牧温泉を代表してご挨拶申し

上げます。

芦ノ牧温泉の開湯は千二百年前とされており、温泉街となってもう百年以上が経過しております。阿賀川が流れる溪谷沿いに旅館・ホテルが建ちならび湯量豊富な天然温泉が自慢の温泉街です。鶴ヶ城の西側に接する国道一一八号線より約十六km南下する地域に位置しており、更に南へ進むと大内宿や塔のへつりといった観光地へと繋がっております。温泉街として

楽しんでいただいたり、広場を活用したスノーパークでは、スノーモービルによるバナナボート、ラフティングボートの牽引やスノー

スライダーでのチューブやソリ、ミニスキーなど冬ならではのアクティビティを満喫していただきました。

戊辰150周年の節目に会津若松市の更なる観光事業の発展のため、国内外問わず幅広い観光客の皆様へ新しい魅力を発信していければと期待しております。

最後になりますが、多くの先人たちが築き上げてきた会津の歴史と功績に深く感謝し、今後とも新たな未来に向けて会津の観光事業の発展に寄与してまいりたく存じます。

戊辰150周年に寄せて

公益社団法人

会津青年会議所理事長

白井 由美



私たち、会津JCの今年のスローガンは「万里一空」です。空は、どこまでも広く、全ての国の空は

ひとつです。空は空間的な広がり

だけでなく、時代を超えても広がっています。百五十年前の戊辰の空、六十七年前に会津JCが設立されたときの空、そして私たちが活動している今も同じ空が広がっています。

百五十年前、戊辰戦争がありました。当時の藩士たちは、文字通り、命を賭してこの戦争を戦いました。なぜ、彼らは負けるかわかっていて戦争に身を投じたのでしょうか？そこには「義」を重んじる会津の精神性があったからだと思います。家訓を一途に守りぬぎ、「義」に忠実だった精神風土です。また、今でも小学生の頃から繰り返し教えられる「ならぬものはならぬ」の精神、「義に死すとも不義に生きず」という考え方はあいつづ子の魂になっています。

七十三年前、日本は太平洋戦争に敗れました。日本全体が暗く沈む中、会津の未来を憂う、三十一名の有志が集まって、私たちの会津JCを福島で最初に設立しました。戦後間もないときに、「会津のために何かしてみよう！会津をなんとかしくなくちゃいけないだろう」と思って会津のために活動してい

たという記録が残っています。

そして今、多様性に注目が集まっています。働き方改革、女性活躍、マイノリティの人権問題などは昨年の大きな関心事でした。今、会津若松市では政府の肝いりでスマートシティ計画が進められています。この取り組みを通して、新しい住民が増え、会津全体でも多様性が高まってくることを考えられます。また、多様な個性を發揮することで、より価値の高い仕事ができるようになることも、時代の要請です。多様な社会を創る、これは口で言うのは簡単ですが、間違いなく抵抗の多い大変な事業です。しかし、ここで今、私たち青年が立ち上がり、多様な社会を創っていくための土台を築くことで、会津の未来をよりよいものに変えることができる、私たちはそう信じています。

百五十年前に会津のために戦ってくださった先人たちに恥じるほどのないよう、会津JCメンバーが一丸となり、会津の未来を明るく豊かなものにするために、虹色に輝く未来を創るために、これからも全力で歩を進めてまいります。

戊辰150周年に寄せて

会津漆器協同組合理事長 高瀬 淳



戊辰戦争では、会津漆器業界も壊滅状態となりました。漆器問屋は略奪を受け、市内の職人は四散して産地の体をなさない状況になりました。しかし、直ちに復興への取り組みが始まり、明治2年には主要な漆器問屋が中心となり、生産方役所宛に度々融資の陳情をおこない、六千両の資金貸与を受けています。

明治三年には株仲間を解散し塗店組合を結成、明治十七年には同業組合準則による若松漆器商組合が結成されるなど、時代に対応した業界へと成長していきます。明治八年京都博覧会、明治十年第一回内国勸業博覧会などで入賞する

など、技術的にも着実に復活しました。明治三十一年には、実業教育費国庫補助法の制定を受け、会津漆器徒弟学校を設立して技術者の養成を図ります。

日露戦争のために国内が大不況に陥った明治三十八年には、新規凶案のコンテストを開催、錦絵や菊桐朱磨など会津を代表する時絵が誕生しました。さらに画期的な鈴木式ろくろの発明、ゴム印時絵の技術改善などにより、大産地としての地位を揺るぎないものとなりました。

昭和三年漆器木工指導所、同五年県立工業試験場会津分場、同八年会津工業試験場と改組改称を経ながら試験研究、試作施設が増強されてきました。

戦後の昭和二十六年には業種別組合を統合する会津漆器協同組合連合会が作られました。また戦後高度成長期には、プラスチック素材などによる代用漆器の生産も伸張してきます。販路も百貨店を

中心に全国に広がり、ギフトや記念品を中心に売上を伸ばしてきました。

しかし、最近、当業界を取り巻く環境は大きく変わりました。生活様式は劇的に変化し、百貨店を中心とした従来の販路は衰退し、販売額の減少に苦しんでいます。ただ、こうした大きな変化は、この百五十年の間には何度もありました。現在は新しい道を模索して

戊辰150周年に寄せて

会津若松酒造協同組合理事長 松本 善六



日頃は会津若松市乾杯条例により、皆様方には宴会の時には会津清酒で乾杯して頂き、身近な存在であります事、御礼申し上げます。会津の伝統産業と言えは「漆器

いる時ともいえます。一方、昭和四十六年に設立された会津漆器技術後継者養成所は、平成十五年に福島県認定会津漆器技術後継者訓練校に発展し、技術後継者を着実に排出しています。この後継者を自立させるためには、公営の貸工房設置などの支援が求められています。当漆器業界は、まさに新しい時代の波に乗れるかどうかの激動の中にあるといえるでしょう。

とお酒」と小学校の低学年の頃社 会の教科書で習った事ですが、そこで酒の歴史というのでは古く古事記にヤマタノオロチを退治する話があるなど「古より松尾の神が醪に舞い降り酒を醸す」など、神武以来の酒造りといわれており、酒蔵や居酒屋などで「酒林」と言う杉玉などはその名残です。

会津藩でも田中文幸などにより「清美川」という藩の酒蔵など酒造りの環境が整備されたりしました。当組合員の中には数百年の歴史を

持った酒蔵もあるはずです。

いい酒を造る条件は若松もそう ですし銘醸地も同じなのですが近い距離に何軒か酒蔵がまとまっているのにお気付きになった事はありませんか？これは偶然ではなく地下水の流れにそっているもので 経験値として酒造りに適した水と いうものを知っていた訳です。

また酒米も福島県酒造好適米の「夢の香」という米は全国的に有名な「山田錦」に勝るとも劣らぬ米で会津の各地区で生産されています。

今年福島県が全国新酒鑑評会で 金賞受賞数全国一位六連覇という

快挙を成し遂げましたが、その原動力となったのが会津清酒です。

水・米と共に「会津杜氏会」という技術集団を育て上げた事で、彼らは清酒アカデミーという学校で三年間酒造りを学び技術と経験の他に科学的知識や新技術への対応など新しいことへの挑戦を続けています。共に教え合い競い合い今まで秘密とされて来た情報を共有し、従来の伝統を守りつつ今の時代に対応する「不易流行」を柔軟に取り組んでいけるそんな可能性を引き出して会津の皆さんにさらに満足して飲んで頂ける酒造りを目指していきたく。

戊辰150周年に寄せて

あいづ商工会会長 安西 秀一

てまいりました。

会津における教育の始まりは、寛文四年（一六六四）日本で初めて、民間による創設した庶民のための学問所といわれている「稽古堂」とされています。

会津藩には、会津の教育振興となる日新館が享和三年（一八〇三）

に設立され、昭和六十二年三月に総工費三十四億を費やし、會津藩校日新館として当商工会河東地区に開館しました。

十歳で日新館に入学すると、十七項目に及ぶ心得により学びましたが、内容が細かく多岐にわたり、かの有名な白虎隊を育んだことになりました。

このような日新館の教育目標となる人材の育成を、戊辰から150周年の節目に、あいづ商工会の経営理念として、地域振興事業に取り組んでまいりたいと思います。



会津藩校日新館

会津藩家訓十五箇条とは？

寛文8年(1668)、初代藩主の保科正之がみすから起草し、儒学者・朱子学者である山崎闇斎に潤色させて制定した。正之の政治、道徳の規範となるものを示したもので、後に代々受け継がれる会津藩政の精神的支柱となった。

第一条は、「大君の義、一心大切に忠勤に存すべく、列国の例をもって自ら処るべからず。若し二心を懐かば則ち我子孫にあらず、面々決して従うべからず」。ここで大君とは徳川将軍家のこと。将軍家にはひたすら忠勤を尽くせ、もし殿が二心を抱くようであれば決して従うな、という意である。

参考：参条文は「会津大事典」より引用



次世代へつなぐもの

会津若松市区長会会長 小林 正一



た。

現在も、会津若松市内には十二番から二十番までの「札所」があり、北会津町の「田村山観音」(かつて鷹狩りで立ち寄った上杉景勝が賞賛したとされる「景勝清水」がある場所)や、一箕町の不動川沿いにある「滝沢観音」など、日本遺産認定後は観光客が多数参拝に訪れているようです。

いにしえより庶民に広く浸透し、戊辰の戦火をくぐり抜け、昭和の戦後以降も各町内会を基盤としてたゆまぬ継承活動が行われてきた有形・無形の二つの「地域資源」を通じ、会津の発展を願いながら寄稿します。

一つ目の「地域資源」とは、平成二十八年に日本遺産に認定された「会津三十三観音めぐり」の「札所」であります。

西国三十三観音をはじめとした巡礼は国内に多く存在しますが、この会津地方でも保科正之によって一六四三年以降に「札所」が設けられた由来があり、会津めぐりと称され庶民に親しまれてきました。

巡礼は国内に多く存在しますが、この会津地方でも保科正之によって一六四三年以降に「札所」が設けられた由来があり、会津めぐりと称され庶民に親しまれてきました。

二つ目の「地域資源」とは、約四百年前の蒲生氏郷の時代から行われてきた「お日市」であります。「お日市」とは、町内ごとに祀られてきた神社・仏閣などの祭礼で、七月から九月まで市内のごくかで毎日のように行われる風物詩です。その皮切りは、日新町(旧北小路町)で毎年七月一日に開催される安産の守り神「御姥尊」の祭礼であり、安産祈願や産後のお礼参りの参拝客で賑わいます。

ここ七日町(旧下大和町)でも、毎年七月二十一日に聖徳太子を祀る「光明寺」で祭礼があり、多数

の老若男女が参拝に訪れます。なお、聖徳太子堂の建立は、会津鑑に一七二四年七月二十二日と記されておりですが、寺は幾度も火災に遭っているため、現在のお堂の建立は年代不詳です。いずれも、地域の貴重な歴史的財産です。これらの「地域資源」は、各町内会の不断の維持・管理による継

文化のもつ力を信じて

会津文化団体連絡協議会会長 森田 慶一



百五十年前、会津地方はいわれなき朝敵の汚名を着せられて戦禍にまきこまれ甚大な被害をこうむり、市街地(郭内)の大半が焼失し、生き残った会津武士は斗南藩

承活動により支えられております。戊辰の時代を超えてなお、地域住民の心の拠りどころであり、世代間の交流の場である大切な地域の財産を次世代へつなぐに、我々には課せられた大切な責務だと考えております。

への移封後の廃藩置県で全国にちりぢりになりました。人々の生活は混乱し希望を失いつつありました。しかし、少しでも生活にゆとりがあれば人間らしい生甲斐を求めるとい願いや、日常の生活に深く根差した文化への思いは持ち続けられました。より高い教養を身につけたいという人々の意欲がいかに高かったかを示す一例が全国の市立図書館第一号の「会津図書館」(明治三十六年)の開設です。その背景には全国屈指の会津藩校

命運を分けた京都守護職



京都守護職は、江戸幕府に置かれた重要な職名のひとつ。幕末、朝廷の動向と京都の治安に不安を感じた幕府が、特に文久2年(1862)に設けたもので、京都所司代・大坂城代・近国大名を指揮する権限を持つものだった。

同年7月、その門地と軍事力から会津藩主の松平容保に白羽の矢が立った。容保は再三にわたり固辞したが、しかし松平慶永(春嶽)らの進言や会津藩祖の遺訓(家訓十五箇条)を忠実に守らなければならぬ、とついに受諾することを決意。12月24日、容保は家臣1,000名を率いて入京、京都の守護職についた。

日新館の教育があり、そこで学んだ山川健次郎・柴四朗らの先見性と人々の学習意欲があったということ。また、武家社会で推奨された能楽「宝生流」も、武士の没落とともに全国的に衰退しましたが、会津では和楽講(明治十一年設立)という愛好会がしっかりと受け継ぎ、「会津宝生」として「加賀宝生」「佐渡宝生」とともに伝統芸能の地位を確かにしています。

さらに、会津独自の文化活動の歴史があります。「文化活動は生活の改善・防衛等の生活文化が中心である」という今なら当然の考えのもとに、翼賛会の傘下に入らず全国第二番目(昭和十六年七月)の広域総合文化団体「会津文化協会」(会津一市五郡で構成)が発足したのです。俳句・短歌・美術・音楽・能楽・民謡等の領域の「文化職能人」を自負する人たちが二十代・三十代の青年層を推進力として活動を始めたのです。太平洋戦争後、進駐軍総司令部の指導で翼賛会傘下団体が解散させられ新たな地域の社会教育振興の命令が出されたとき「会津文化協会」は何の指弾を受けることなく従来の活動を継続し、昭和三十七年に現在の「会

津文化団体連絡協議会」に発展し、活動を続けていることはご周知のとおりです。

全国からの観光客から「会津はどこかよそとはちがう」といわれることがしばしばあります。それは、百五十年の歴史以前からの受け継がれる「ならぬことはならぬものです」の言葉に集約される精神文化の流れかもしれません。会津の文化に誇りを持ち、これからは先人の思いを胸に文化を高めていくにはありませんか。

戊辰(ぼしん)とは?



年や月、日、時刻、方角などを表す干支(えと)のひとつ。甲子(きのえね)から始まり、五番目が戊辰(ぼしん、つちのえたつ)である。

京都で鳥羽・伏見の戦いが起きた1868年の慶応4年・明治元年が、干支で戊辰の年にあたることからこの戦争が「戊辰戦争」と呼ばれるようになった。ちなみにその前の戊辰は1808年(文化5年)、その後の戊辰は1928年(昭和3年)であった。最近では1988年(昭和63年)が戊辰の年に当たった。